

天然エビを強化、養殖と値差縮小 マルハニチロ水産第三部部長・金森正幸氏に聞く

国内エビ取扱高トップシェアのマルハニチロは今年、天然エビに力を入れる。世界的に需要が高まり養殖物の価格が下がりにくい中、養殖と値差が縮まってきている天然を売り込む。水産第三部の金森正幸部長に、世界のエビ生産や同社の販売動向を聞いた。

アジアのバナメイ生産量は昨年を若干上回る見通し。タイ、ベトナム、インドネシア、インドで大きな病害はなく、シーズン初めの池揚げは順調に進んでいる。タイは稚エビの耐性が相当強くなったようで、EMS（早期死亡症候群）の被害は克服したという。

また、中南米の養殖は粗放養殖バナメイが中心で、まだ新しい池を造る余地もあり、減ることはない。アルゼンチンアカエビ漁も順調な漁獲だ。

ブラックタイガー（BT）はますますニッチ感が増している。これ以上生産、流通量が増えることはないだろう。供給量が少ないこともあり、特定の産地に物があるなど注目が集まると、途端に買いが入る。インドネシアのタラカン産がこれまで常に最高値だったが、産地間の価格が逆転することもあるようだ。

世界需要増で買い付け厳しく

日本の殻付き消費は底打ち感がある。加工品の市場も成熟したとみている。今後エビ消費は人口減と同じような比率で減るのではないかと懸念している。

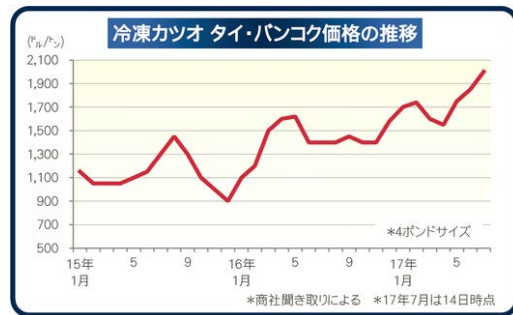
ただ、世界的な需要が供給増加を上回る勢いで強まっている。欧米は順調に消費が伸び、中国はさらに輪をかけて伸びが顕著で、値段よりもまず物の確保を優先する傾向が強い。日本は昨年円高だったため買いやすかったが、今年は仮に1ドル＝110円前後のまま円相場が推移すれば、コストアップになる。十分に物を確保できるか懸念している。

扱い目標4万トン

今年は原版、加工品含め天然エビ扱いを広げる。天然と養殖の値差はかなり縮まってきた。当社は加工筋向け販売が主体だったが、小口の顧客にも天然を薦められるよう、組織改変して天然に特化するチームをつくった。

ただ、日本の若年層はぶりぶり感の強い伸ばし、むきエビに慣れており、天然の食感を好まない。今の市場に天然が受け入れられるか未知数だ。それでも皆がバナメイを買い合うのではなく、需要を散らして買いやすい価格で提供することは重要だ。

4年ぶり大台2000ドル



ARアカエビ 好漁も現地値1割高世界の需要が下支え



漁獲量は6月が前年同月比26%増の2万6763トンと好漁。商社筋によるとL3が「昨年より獲れている」。ただ、L4以下の小型が獲れたサンホルへ湾の一部の漁場が、6月下旬にクローズした。現段階で影響はないが「今後の懸念材料」（商社筋）との声もある。

ARアカエビの市場は従来の欧州にとどまらず米国や中国などに広がっており、現地相場を支えている。さらに円安によるコスト増が壁となり、7月中旬の内販価格は前月より50円ほど上がりL2がキロ950円、L3は引き続き「ほとんど出回りがない」（同）。今後は新物搬入がまとまる9月まで、内販価格は横ばいの見通し。9月以降は下がるが、L3でキロ850～800円だった「前年同月の水準まで安くはならない」（同）とみる。

冷凍カツオの国際相場が4年ぶりの高値となっている。加工筋によると、世界最大の原料加工国であるタイ・バンコクの海外巻網ライン凍結品（B）価格は14日時点、1尾1・8キロ上サイズでトン2000ドル。2013年5月以来の2000ドルの大台に乗った。世界的な不漁が要因。7～10月は外国籍海巻船が浮き魚礁で魚を集めて漁獲する高効率漁法「FADs操業」の禁止期間に入る。「今後の供給も少なく、相場は下がりそうもない」（加工筋）

冷凍カツオ国際相場高騰

冷凍カツオの国際相場が4年ぶりの高値となっている。加工筋によると、世界最大の原料加工国であるタイ・バンコクの海外巻網ライン凍結品（B）価格は14日時点、1尾1・8キロ上サイズでトン2000ドル。2013年5月以来の2000ドルの大台に乗った。世界的な不漁が要因。7～10月は外国籍海巻船が浮き魚礁で魚を集めて漁獲する高効率漁法「FADs操業」の禁止期間に入る。「今後の供給も少なく、相場は下がりそうもない」（加工筋）

ARアカエビ 好漁も現地値1割高世界の需要が下支え

アルゼンチン（AR）アカエビは漁獲が順調に進んでいる一方、世界的な需要が強まり5月下旬の操業スタート時から現地オファー価格が下がらず、前年同月比1割高。各商社は国内在庫が薄いL2（キロ当たり20/30尾）やL3（30/40尾）サイズを中心に買い付けているが、内販価格（会社出し値）は昨年と同程度までには下がらない見込みだ。

漁獲量は6月が前年同月比26%増の2万6763トンと好漁。商社筋によるとL3が「昨年より獲れている」。ただ、L4以下の小型が獲れたサンホルへ湾の一部の漁場が、6月下旬にクローズした。現段階で影響はないが「今後の懸念材料」（商社筋）との声もある。

ARアカエビの市場は従来の欧州にとどまらず米国や中国などに広がっており、現地相場を支えている。さらに円安によるコスト増が壁となり、7月中旬の内販価格は前月より50円ほど上がりL2がキロ950円、L3は引き続き「ほとんど出回りがない」（同）。今後は新物搬入がまとまる9月まで、内販価格は横ばいの見通し。9月以降は下がるが、L3でキロ850～800円だった「前年同月の水準まで安くはならない」（同）とみる。

冷凍カツオの国際相場が4年ぶりの高値となっている。加工筋によると、世界最大の原料加工国であるタイ・バンコクの海外巻網ライン凍結品（B）価格は14日時点、1尾1・8キロ上サイズでトン2000ドル。2013年5月以来の2000ドルの大台に乗った。世界的な不漁が要因。7～10月は外国籍海巻船が浮き魚礁で魚を集めて漁獲する高効率漁法「FADs操業」の禁止期間に入る。「今後の供給も少なく、相場は下がりそうもない」（加工筋）

養殖ブリ

鹿児島産養殖ブリの7月上旬の浜値は、昨年に池入れした2年魚がキロ880円(野締め、3・5キロサイズ)前後で推移する。2015年以降で最も高い水準。主産地である東町漁協(鹿児島県長島町)は「量販店の刺身商材として売れている。活魚としても引き合いがある」という。

鹿児島は養殖ブリの生産量が日本一。中でも東町漁協は年間200万尾の出荷体制を整え、全国シェア1割を占める。一昨年春に池入れした3年魚は前月までに大半の出荷が終わり、現在

さかなの動き

浜値880円、15年以降最高 刺身商材で荷動き順調

は2年魚を中心に販売している。「生産者にとっては好ましい状態。しばらく現状の相場が続くだろう」(東町漁協)とみる。

一方、同じく鹿児島が生

産量日本一の養殖カンパチの市況は低迷している。7月上旬の浜値は一昨年春に池入れした3年魚がキロ950円(活魚、1尾3・5キロサイズ)。15年以降で最低水準にある。個代の高騰を受け、生産者でつくる協議会が取引先に値上げを申請するが、希望する価格には届いていない。

カンパチの在池は3年魚が中心だが、今からは2年魚の出荷も始まった。産地関係者からは「夏の商材としてブリが定着しつつある。その分カンパチのマーケットが奪われている」(産地関係者)との声がある。

(木寺弘和)



ホタテ

さかなの動き

オホーツク沿岸のホタテ漁は、南部の沙留、網走で6月13日に本操業入り、全地区が出そろった。6月25日の週からは同月下旬分の原貝値決めが順次行われており、来期の増産見通しや玉冷の内需鈍化で内販復活が重要なシーズンとなる中、前年同様に4割安など、ほとんどの浜で冷静な価格設定となっている。

6月26日に朝別、佐呂間・常呂、網走が値決め。朝別は同月19~24日分でキロ200円、歩留まり11・1%、アソート3S-2S-4S。佐呂間・常呂が16~30日分で213円、11・4%、4S-5S-3S。網走が210円、11%、3S-2S-4S。

6月30日に値決めを実施した狭払村は、同月1~30日分で190~197円。190円の原貝は歩留まり10・7%、アソート3S-4S-5S、196円の原貝が10・9%、3S-4S-2S。

玉冷の内販に照準を合わせ、各地で原貝が前年よりも値下げされている。ただ、「新物の卸値は3S・キロ2500~3000円間のスタートか。前年よりも下方修正されるが、高値に変わりなく、内需喚起の効果は薄いかも」と卸筋。「中途半端な相場になれば、来年しっぺ返しを食らう。生産者にはそのことをきちんと理解し、原貝価格を打ち出してほしい」と産地加工業者筋。(加藤聡則)

原貝4割安の浜も 玉冷の内需喚起もう一息か

漁協名	2017年度計画(トン)	前年度実績(トン)	6月20日現在累計水揚量(トン)	前年度同期比(%)
宗谷	28,000	107%	9,046	112%
狭払村	37,000	92%	13,159	133%
朝別	12,000	187%	2,817	404%
桂津	13,000	60%	4,490	122%
北部合計	90,000	95%	29,512	132%
羅武	9,000	171%	1,714	165%
沙留	8,000	109%	1,740	116%
紋別	26,600	185%	5,563	187%
湧別	15,000	94%	3,056	150%
佐呂間	5,300	80%	872	108%
常呂	21,200	80%	3,529	107%
西網走	700	69%	76	58%
網走	7,800	115%	883	103%
斜里第一	75	227%	29	145%
ウトロ	50	263%	19	475%
産協合計	93,725	111%	17,481	138%
総計	183,725	103%	46,993	134%

※漁場造成含む ※サロマ湖養殖除く (みなと新聞調べ)

アライアンスシーフーズ トラウト養殖1万トン目標 Sustainable Seafoods from NORWAY

横浜冷凍グループのアライアンスシーフーズは、ホフセスインターナショナルA S (H I) 社と共同で昨夏に買収したノルウェーの養殖事業会社フィヨルドラックス・アクア (F A) 社のトラウトサーモン生産量を1万トンに設定する。現在の生産量6000~7000トンから水準を引き上げ、調達力を強化。H I 社の従来の加工・輸出事業に加えた生産、加工、販売の垂直統合型ビジネスで収益向上を目指す。

H I 社はアライアンスシーフーズと業務提携するノルウェーの大手水産加工会社。主にノルウェー産アトランティックサーモンを原料に加工製造し、ポーションカット、フィレー、燻製製品を北米や欧州向けに輸出。グループ会社のホフセスバイオケア社が製品に使わない部位を利用したサーモンサプリメント事業を持つ。

F A 社は同地域で現在5カ所の養殖イクスを保有。間もなく6カ所に拡大する予定だ。ふ化場の設備を拡大し、稚魚の増産を図る。池入れするサイズも1尾70グラムから倍の130~140グラムに上げて生存率を高める。給餌方法も機械化を取り入れ、作業効率性を改善。計画的に養殖できる環境を整える。垂直統合型ビジネスの推進により「トレーサビリティの強化にもつながるため、取引における信用力を得られる」(アライアンスシーフーズ担当者)。

